

コイキングお嬢様

キノココ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

コイキングを使うお嬢様とライバルたちの物語。

目次

旅立ちとライバル

旅立ち | 1

お嬢様と少年 | 5

コイキング vs ヒトカゲ | 10

エクレア博士 | 16

森と電気 | 23

新聞記者 | 28

イリオとリオル | 33

レイクと自称エリート | 38

ピカチュウ VS キノココ | 42

旅立ちとライバル

旅立ち

コイキング。

それは釣りなどで取れるポケモンである。

凶鑑の説明では『ちからも スピードも ほとんどダメ。せかいで いちばん よわくて なさけないポケモンだ』と言う風に認知されている。

使える技は『跳ねる』、『体当たり』、『レベル上げると『じたばた』。』

ただそれのみである。

故に周囲では使えないポケモンと認知されていた。

——お父様。何故この子はイジメられているんですか？

——それはね、弱いからだよ。

小さいながらに社会の醜さを知った。

弱者は取り除かれ、強いものだけが生きる。

私の父はまさにそんな人だった。

だから私は父のようにはなりたくないと思ったし、この子を守りたいとも考えた。ただ守りたいだけではない、この子を強くして社会に認められてもらいたいと考えていた。

十二歳の春。

春と言えば出会いと別れの季節だが、私たちからすれば旅立ちの季節である。

新品の靴に春色のワンピース。

お母様から譲り受けた斜め掛けの鞆をかけて鏡を見る。

「よしっ！ これで大丈夫ですね」

そう言いながら、白色の帽子を被って唯一の手持ちを鞆の中にしまう。

これは私がする初めての反抗である。

親の言うことを聞いて、聞いて、聞いて。

そうやって礼儀正しく理想の娘であろうとしていた。

でもきつと、それじゃ私は強くなれないし、この子を強くすることもできない。

だからこれは初めての反抗、家出なのだ。

幸い家はとて広い。

出て行つてもすぐにバレることはそうないはずだ。

私はそつと忍び足で外に出て、門を通り出て行つた。

「…………ごめんなさい。絶対にいつか、戻りますから」

門に向かってそう言い、私は鞆の紐を握って走り出した。

少し離れたところにある森の入り口。

既に自分の家は見えない位置まで来て、改めてもう戻れないことを知った。でもそれでいいのだ、いいのだと頭の中で考える。

軽い深呼吸をして辺りを見回す。

誰もいないことを確認して鞆から一つ、ボールを取り出した。

ほんの小さい頃に捕まえた、私の持つ唯一のポケモン。

「コーちゃん」

ボールを投げて、コーちゃんと呼んだポケモンをボールから出す。

出てきたのは元気よくビッチビッチと跳ねるポケモン。

赤く、長い髭を持つ、周囲からは弱いと蔑まれるポケモン。

これが私の唯一にして、大切なポケモン、コイキングである。

「……………」

とにかく陸上で跳ねている。

そこでハツとして私は気づいた。

「み、水！ 池はどこですか!？」

少し離れたところにある池に入れると、ようやくコーちゃんは笑顔を見せる。釣られて私も笑顔になる。

そして地図を広げ、目的地を決めるところから私の旅は始まった。

お嬢様と少年

「ち、地図ってどう読むんでしょうか……」

家から勝手に持ち出した機械式の地図を見て、首を傾げる。

私はあまり家から出たことがないせいか、地図を読むことができないのだ。

現在いる地点を示すのが赤い点だということはわかつている。

だがしかし、その赤い点がどっちを向いているのかわからない以上迷っているのだ。

軽く歩いてみればわかるのだろうか、ここは森。

同じ景色ばかりで迷うだろう。

その証拠として既に迷っている。

「……旅ってこんなに大変なんですね」

一人呟いてため息をつく。

コーちゃんは近くの池で、バシャバシャと楽しそうに泳いでいた。

コイキング。

数が多く、一時期食用として利用されていたこともあるポケモン。

しかしその数の多さに反して未だ謎の部分が多いと言われている。

育てる人もいないため進化するかも不明である。

私はポケモンのは全くと言っているほどわからない。

だけでも、きっと強くなってみせる。

もう一度心の中で誓って、空を見上げた。

その時だった。

「え、こんなところに人が……？」

「え？」

後ろから声が聞こえて、振り返ってみるとそこに一人の男の子が立っていた。

大体私の同じくらいの年齢だろうか。

赤色のキャップを被り、リュックを背負っている。

彼は私のことを見て、少し驚いていた。

「こんにちは」

取り敢えず挨拶を試してみる。

「あ、うん。こんにちは」

向こうも挨拶を返してくれた。

外に出ることが滅多にない故か、こうして人に会うだけでもかなりドキドキしている。

彼は歩いて私のところにやってくる。

「こんなところで、どうしたんだ？」

「その、道に迷ってしまいました……」

「あー、確かにここら辺は迷い易いからなあ。人があまり来るところでもないし」

「そうだったんですね」

迷うの私だけではないらしい。

なんか安心したような気分になる。

しかし、だとしたら彼は何故ここにいるのだろうか。

「あ、俺はレイクって言うんだ。よろしく！」

「私はセナと言います。まだ新人のポケモントレーナーです！ よろしくお願いします

！」

「奇遇だな！ 俺も新人のポケモントレーナーなんだ」

「そうなんですか!?! なんだか嬉しいです！」

それを聞いて彼は、リュックからボールを一つ取り出す。

そしてすぐ近くに落とすように投げる。

落ちるその瞬間、ボールが開いて中から一匹のポケモンが姿を現した。

尻尾に火、全身赤色のトカゲのようなポケモン。

「こいつはヒトカゲ、俺の相棒だ。いずれ最強になるんだ！ よな？」

ヒトカゲと呼ばれたポケモンは、それに反応するように頷いて鳴いた。

軽く彼の周りを走り回り、少し疲れたのか寝転がる。

それを見てレイクは苦笑していた。

ヒトカゲをボールに戻すと、私に聞く。

「それでセナは？ 何を連れているんだ？」

「そうですね……ここはトレーナーらしく、戦いませんか？ それで私のポケモンを見

せます！」

「んー……そうだな！ トレーナー同士。目があったらそれは勝負の合図！ 初戦闘だ

……行くぞ！ ヒトカゲ！」

「行きますよ！ コーちゃん!!」

池の中からコーちゃんが跳ね上がる。

そして地上に出てきてビチャビチャと跳ねている。

それを見たレイクはとても驚く。

「こ、コイキング!?! た、戦えるのか……?」

「舐めないでくださいよ、絶対に勝ってみせますから！」

「……わかった。トレーナーだからな！ 真剣に戦わなくちゃならないよな！ ヒトカ

ゲ!! 『引つ掻く』だッ!

「コーちゃん! 『体当たり』です!」

コイキングは跳ねながら、ヒトカゲは走りながら。

お互いに攻撃を繰り出した。

コイキング vs ヒトカゲ

トットトットと走り出したヒトカゲに向かって、コーちゃんは跳ね回る。

そして地面に落ちたと同時に、一直線に跳ね飛んだ。

速度は結構出ているようで、ヒトカゲは驚きつつも爪を振り下ろし『引っ掻く』を放つ。

私はすかさず指示を出した。

「コーちゃん！ 『跳ねる』で回避です！」

それを聞き届けたコーちゃんは、事前に調整していた速度でヒトカゲの目の前に落ちると、跳ね上がり飛び越え避け切った。

レイクは驚き戸惑いつつもヒトカゲに指示を出す。

「ひ、ヒトカゲ！ 『鳴き声』だ！ コイキングの動きを止める!!」

サツと後ろを向いたヒトカゲが、コーちゃんに向かって『鳴き声』を放つ。

単純にポケモンから発せられる『鳴き声』だが、コーちゃんはそれを嫌がっているようで、もう一度跳ねた時の速度が少し落ちていた。

コーちゃんが地面に落ちてビタンビタンと跳ねているのを見て、レイクは驚いてい

た。

「ど、どうしてあんな動きが……!」

「私とコーちゃんは小さい頃からずっと一緒にいるんです!　ずっと、ずっと『跳ねて』いたんです!」

「練習の成果、つてことか……ならば!　行くぞヒトカゲ!　『火の粉』だッ!」

「コーちゃん!　『もう一度『跳ねる』からの『体当たり』です!」

レイクがそう指示を出すと、ヒトカゲは口を大きく開けて『火の粉』を吐いた。対してコーちゃんは『跳ねて』攻撃を避けながらヒトカゲに近づく。

しかし案外広く飛んだ『火の粉』はコーちゃんに少しばかり降りかかっていた。だが大したダメージはないように見える。

と言うよりかは、効いてない。と言う感じであった。

「やっぱタイプ相性が悪いか……!」

「……………タイプ、あいしよう?」

「ん?　どうした?」

「あの。タイプ相性つて、何ですか?」

「え?」

「え?」

私たちのポケモンは指示が止まったことに困惑し、私たちのことを見る。

ヒトカゲは走ってレイクの元へと向かい、コーちゃんはピョンピョン飛んで池の中に入る。

長時間陸地での行動はやはり苦しいようだった。

そして私は聞き覚えのない言葉に少しだけ驚く。

私の家は何故かポケモンを禁止していたため、ポケモンに関する本は一切なかったのだ。

コーちゃんは例外として飼っていたのだが、そのせいでポケモンに関する基本すら学べていないのだ。

きつとレイクの反応を見るにポケモンでの基本なのだろう。

「……知らない?」

「その……知らない、です」

「えつとじゃあ、ポケモンのタイプについては?」

「わからないです……」

レイクからは少し困惑した様子が伺える。

どうもかなり基本的なことのようであった。

少し、悩んだ様子を見せる。

そして私に言った。

「聞いていいか？ 何で何も知らないのに、ポケモントレーナーに？」

「その……それは……」

あまり人に、私の家のことは話したくない。

そのせいで少しばかり言い淀んでしまう。

レイクはそれを見て、こう言う。

「……なんか言えない事情があるんだな。それなら何も聞かないことにする」

「ありがとう、ごさいます……」

「んで……そうだな、少し勉強しようぜ」

「勉強、ですか？」

「ほら、トレーナーなのに何も知らないのはまずいだろ？ これからポケモントレーナーとしての基本、全部教えるから。それで俺たちはライバルだ。同じとこから、一から始めるんだからな！」

そう満面の笑顔で言い放った。

ライバル。

とても良い響きの言葉である。

私はなんだかワクワクして、頷いた。

「はいー」

まず最初に教えてくれたのはポケモンのタイプについて。

私たちは近くの石に腰掛けて話をする、レイクは木の棒で土に絵を描きながら。

「まずポケモンには全部で十八種類のタイプがある」

「十八もですか!?!」

「こそ。シンプルなので言えば『炎』、『水』、『草』とかだな。例えばコイキングとかは水タイプだぞ」

そうやって絵を描く。

しかしその描いた絵はヒトカゲが踏みつけて消してしまった。

「コーちゃんは魚だから水なのだろうか。」

「じゃあきつと彼のヒトカゲは……。」

「じゃあその子は炎ですか?」

「ああ、こいつは炎タイプなんだ。炎タイプだからこそ水に弱いんだ」

「それがタイプ相性ですね!」

「そう言うことだ!」

だんだんとわかりかけてきた。

十八種類。

全タイプを覚えてタイプ相性も覚えなきゃいけないだろう。でもそれはきつと、楽しいことだと思う。

「ここで教えられることはこのくらいが限界か……そうだ！ この先のタウンにポケモン博士が住んでるんだけど……一緒に来るか？」

「行きたいです！」

「よし……じゃあ行くか！」

「はい！」

私たちはポケモンをボールに戻して、一緒に歩き始めた。森の出口を目指して。

エクレア博士

レイクはキャップを少し動かして被り直す。

私も同じように、つばの広い帽子を軽く動かす。

森の中歩くこと数十分。

気づけば周囲は森ではなく、町が見えていた。

白く清潔感のある建物が一つ、家が何件か。

そして赤い屋根、不思議な建物もあった。

「ここは……」

「ハガニアタウン。つってもタウンというほどの規模はないんだけどな。アスレナ地方

でも一番小さな町だし」

「小さくて可愛い町ですね！」

「小さい代わりに何にもないけどな……」

と言って小さく笑った。

私たちは歩いて白い建物へと向かう。

白い建物は大きく、入り口には警備員の人立っている。

そのことからかなり重要な建物だということがわかった。

レイクはリュックから何かを取り出す。

それは手紙のようなもので、その手紙のようなものを警備員に渡すとすんなりと通してくれた。

中に入ると白衣の人たちが忙しそうにあちこち駆け回っていた。

私たちはそれを避けながら奥へ向かうと、私より少し年上ぐらいの少女が電話をしていた。

「え？ 何？ ……リノタウン!? またアトミック団!? もうっ！ そこにあの人が滞在してるでしょ!? ほら！ 協力を……っど。とにかくあの人なら解決できるから！」

そう言って受話器を勢いよく置く。

置いてすぐに、近くにかけてあったキャスケット帽を被って私たちのところに来た。

「レイクくん！ 元気にしてたかい？」

「まあそれなりに」

「で、隣の君は？」

「あ、私、セナって言います！」

「この子もポケモントレナーなんだよ。しかもまだ新人の」

へえー、と言って私の周りをくるくる回る。

緊張してしまつて、バッグの紐をギュツと握る。

少しすると、何故か頷いて椅子に座つた。

「自己紹介が遅れたね。私はここのポケモン研究所の所長を務めてるエクレアさ」

「エクレア博士、ですか？」

「まあ、一応博士とは呼ばれてるね」

一見するとそうは見えないのだが実際はとても偉いらしい。

カントー地方と呼ぶる場所出身で、元々はオーキド博士と呼ばれるとても偉い人の元で働いていたらしい。

しかしここ、アスレナ地方でポケモンが見つかったことをキツカケに独立して研究所を立てたとのこと。

「それで君は何のポケモンを使っているんだい？」

「コイキングのコーちゃんです！」

「こ、コイキング!? ふーむ……これはまた。でも何で、君はコイキングを？」

私は説明した。

自分の目指していることを、自分のしたいことを。

この子とともに、強くなれることを知らしめたいと。

それを聞いてエクレア博士は少し考え込む。

何かをぶつぶつ呟いてから、こう言った。

「それなら君、ポケモンリーグに挑んでみないかい？」

「ポケモンリーグ、ですか？」

「別名ジムチャレンジ。ガラル地方のジムと同じ形式でやってるのさ」

「あの、そもそもジムって、何ですか？」

「そ、そこから……」

そう言うのとエクレア博士はジムについて説明を始めた。

八つの町にそれぞれ一人。ジムリーダーと呼ばれる人がいること。

その人たちを倒すことでバッジを手に入れられること。

そして八つ集めた時、ポケモンリーグと呼ばれるその地方で、最強のポケモントレ

ナーを決める大会に出られること。

私はそれを聞いて、ワクワクしていた。

そして同時に考えていた。

コーちゃんの名を知らしめるためには、この方法しかない。

「どうだい？ 参加してみないかい？」

「参加したいです！」

私の意思は既に決まっていた。

レイクも隣で言う。

「俺も参加したい。ポケモンリーグって推薦がないといけないんだろ!」

「別に推薦状がなくても試験をさえ受ければジムチャレンジはできるけどね」

「そ、そうなのか」

「でも君にも書く予定だったさ……二人とも、推薦状を書く代わりに一つ、頼まれてくれないかい?」

私たちは頷く。

それを見てエクレア博士は少し笑う。

机の棚を開けると、二つの機械を取り出した。

メモ帳程度に手軽なサイズで、オレンジ色をしていた。

「これは?」

「これは私の発明した特別製でポケモン凶鑑さ。未だ生態系の知れていないポケモンは多い。レイクくん、君にはこれを使ってアスレナ地方に住むポケモンたちを調べて欲しい。そしてセナくん。君にもだ。ただし君にはコイキングの成長記録をつけてもらいたい」

「成長記録ですか?」

「うん。コイキング使うトレーナーなんて滅多にいないからね。たまにいいから成長

記録を見せて欲しいんだ」

「わかりました」

ウンウン、と言つてもう一つあるものを渡してきた。

赤と白の丸いボール。

モンスターボールである。

「あの、これは？」

「君たち、今は手持ち一匹だけだろう？ ジムチャレンジは最初の規定としてポケモンを二匹以上、そしてバツジが集まる度に規定数が増えて行くんだ。これは決まりだからね。どうしようもないのさ」

「そ、そうですか……」

コーちゃんだけ、っていうのはできないみたいだ。

決まりならば仕方ないのかもしれない。

だけど私はあまりポケモンのことを知らない。

ポケモン図鑑とのにらめっこになりそうである。

「さて、それじゃあ私はそろそろ仕事に……え？」

何!?

またあ!?

もういい私が行く

！」

近くの研究者に何かを言われたエクレア博士は、外に向かって走っていった。

私たちを顔を見合わせる。

レイクが言った。

「……さっきの森にいったらポケモンがいるから、そこ行くか？」

「そうです、ね。行きましょう！」

私たちは森の方に向かって歩き出した。

森と電気

私たちは出会った森へと戻ってきていた。

あまり人が来ないおかげで、ポケモンは結構増えているらしい。

改めて見てみると、確かに隠れてはいるがチラチラとポケモンたちが見えていた。

特に虫の姿をしたポケモンが。

私はカバンの中にある新品のボールを一瞥して、森を見渡していた。

「今日は一段と虫ポケモンが多いな……」

「そうなんですか?」

「ああ、けど虫ポケモン以外にもここら辺は珍しいポケモンもいて、特に珍しいのはピカチュウだ。俺はそのピカチュウを探しているんだ」

「ピカチュウ……! わ、私でも知ってますよ!」

世界的に有名でいて、その姿を見ることのできない珍しいポケモン。

有名な理由は知らないが、ポケモンに一切関わることのなかった私でも知っているくらいだ。

何かとんでもないことをしているのだろう。

と、考えていたところ、レイクが言う。

「やっぱ伝説のトレーナーが使ってたポケモンだからな」

「伝説のトレーナー？」

「そつちは知らなかったかあ……伝説のトレーナーってのは、十年前くらいかな？ カントー地方のセキエイリーグって言う世界最高峰のリーグで頂点に立った人のことだ。ただ頂点になっただけじゃない。これがまたすごくてな！ 相棒のピカチュウと共に、ロケツト団って言うマフィアを一人で壊滅させたんだ。他にも色々してるんだが……話すと長くなるからな」

「今度、自分で調べてみます！」

「色々面白い話があるからな。調べると結構時間かかるぜ……んじゃそろそろ探すとしますか！ じゃあまた後でな！」

ヒトカゲを出して、森の奥へと走って行ってしまった。

私も近くにあった池にコーちゃんを出して、池の前に座る。

コーちゃんは何処か、真剣な顔つきで私を見つめていた。

「……絶対に強くなって、ポケモンリーグに行きましょう！ コーちゃん！」

それを聞いたコーちゃんは跳ね飛んで鳴いた。

私はその場から移動するために、コーちゃんをボールに戻してカバンの中にしまう。

そして貰ったポケモン図鑑を引っ張り出す。

ポケモン図鑑をよく見るとカメラが付いていた。

試しにそのカメラを近くにいたポケモンに向けてみた。

「おー、カメラに写したポケモンの説明が出てくるんですね。えつと……キャタピー、芋虫ポケモン、ですか」

可愛らしい見た目をした芋虫が、私を見て首を傾げていた。

次のポケモンを写してまた説明を読む。

なんだか楽しくなってきた。

少し周囲を探索していると、一匹のポケモンが目に入った。

黄色くて、もふもふしていて、蜘蛛みたいな。

大きき的には十センチくらいだろうか。

「可愛いですね。なんのポケモンなんでしょうか……？」

色が黄色ではなかったら見逃していたかもしれない。

私は図鑑を向けて、そのポケモンを見る。

「くつつきポケモン……名前は、バチュル。虫・電気……くつついて静電気を貯めるんですか。なんか大変そうですね」

少し興味深くて、私はそのポケモンへの近寄る。

周りを見るが同じようなポケモンはいない。

この子だけのようだ。

私が軽く人差し指を出してみると、前足二本でガシツと掴んできた。

十センチくらいだからか、掴んでいる手は痛くはない。

どちらかと言うとほんの少しビリビリする程度だ。

電気を体の中に溜め込んでおくらしく、自分では生み出せないらしい。

指を掴んでいるところを見て、少しすると今度は顔をスリスリと指をこすりつけてきた。

なんとも愛らしい姿である。

私はカバンの中のボールをチラツツと見る。

そしてバチュルの方には視線を戻すと、手にガシツと全身で捕まっていた。

流星に指に捕まることは不可能だったようだ。

私はそつとボールを取り出して、後ろからコツンとぶつける。

するとバチュルがボールの中へと入って行った。

ボールの白い部分が緑色に光って、少し動いた後カチャツという鍵のしまったような

音がした。

「……………これで、いいんでしょうか？」

この日は初めて、自らの力でポケモンを捕まえたのだった。

新聞記者

私は捕まえたボールをカバンに入れて、ハガニアタウンへと戻ってきていた。

私は待ち合わせ場所に決めた公園へと訪れる。

この町の公園にはそれなりの大きさの噴水がある。

基本的に水ポケモンなどはそこへ出すことが許されており、私はその中にコーちゃんを出す。

そしてもう一つ、ボールを投げてさつき捕まえてきたばかりのバチュルを……いや、チュチュを出した。

「今日からあなたの名前はチュチュです！ よろしくお願いしますね！」

そう言つて私はチュチュを抱きかかえる。

と言つても抱きかかれるほどの大きさはなく、腕に登らせる程度だ。

腕にひつついているマスコットみたいでなんか可愛かった。

腕をコーちゃんに近づけてみる。

コーちゃんもチュチュもお互い興味深そうに見つめあう。

するとチュチュが噴水の縁に行き、自らコーちゃんへと近づいた。

コーちゃんもチュチュへと近づいて行く。
「仲良くなれそうですね」

私はホツとして、二匹の近くへと座る。

コーちゃんは嬉しそうにバシャバシャと泳ぎまわり、チュチュはそれを追いかけるように縁を走る。

それを見ていた時だった。

パシャつと、カメラのシャッター音が聞こえた。

私とその音のした方を見てみると、カメラを構えた男の人が立っていた。

「あの……?」

私は気になって、声をかけてみる。

「おっと……また無断で撮っちゃった……ごめんね。俺の悪い癖で。良いポケモンと良いトレーナーを見つけると、つい撮りたくなっちゃって」

「はあ……そう、なんですか」

「あ、俺はイリオって言うてね、新聞記者やつてんだ。リノタウンの方から来たばつかで、何かネタを探しに来ただけ……」

そう言うてコーちゃんとチュチュを撮り続ける。

別に私はそういうのが嫌なわけではないから気にしてはいない。

けど、彼はすぐに自身のしている行動に気づく。

「あ、ごめん。またやつちやった」

「別にいいですよ。この子たちも嫌がつているわけではないですし。あ、私セナつて言います」

「そっか、セナちゃんか。君はジムチャレンジャーなのかい？」

「ジムチャレンジャー、ですか？」

聞いてみるとどうも、ジムチャレンジに挑む人のことを言うらしい。

まだやってはいないが挑むから、一応ジムチャレンジャーとは言えるのだろうか。

私がそのことを伝えると、一つボールを取り出した。

「見たところそのバチュル、まだ捕まえたてみたいだね。そのコイキングは……へえー……楽しみだな」

「楽しみ、ですか？」

「成長に期待、つてやつかな。で、君も一応バトルの時の感覚は掴んでおきたいんじゃないかな？」

確かにチユチュをいきなり戦わせるなどと言うことはできない。

私はコーちゃんです勝ち進めようとは思っているが、コーちゃんだけではいつか疲労する時が来る。

だから交代して、戦えるようにしときたい。

どんな技が使えるか、どうやって戦うのか。

知っておきたかった。

「もし俺が勝ったら君のこと、記事にしてもいいかな？ 期待の新人トレーナー、つてね」

！

「なんかそれ、私が勝つてもしそうですね……」

「あ、バレた？」

どうも、勝つても私のことを新聞の記事にするつもりらしい。

それはそれで困るのだが……まあ、多分大丈夫だろう。

家族はそう滅多に新聞を読むような人たちでもないし。

「じゃあ……もし、俺が負けたら。こいつをあげよう」

そう言つて腕につけてあるリングを見せてきた。

黒色のリングで何か石のようなものがはまっている。

後変な模様が刻まれていた。

「それは？」

「お守りみたいなものさ。どうだい？」

「わかりました。チュチュ、来てください。コーちゃんは少し見といてくださいね！」

チュチュはやる気なのかびよんびよん跳ねていた。

それを見て頷いたイリオはボールを投げる。

中から出てきたのは……。

「うし。じゃあ行くぞ！ リオル！」

リオルと呼ばれた青色のポケモンだった。

イリオとリオル

なんだか強そうなポケモンである。

リオルと呼ばれたポケモンは、軽く拳を振ると敵を前にして構えた。

チュチュはやる気満々で、少しばかり電気を放出していた。

自ら電気を生み出すことができないと書いてあったが、大丈夫なのだろうか。

「リオル！ 『奮い立てる』！」

「え、えつと……」

私はポケモンがどんな技を覚えるのか、とか全くわからない。

しかしさつき図鑑を見た時に書いてあった技一覧を思い出して図鑑を見てみる。

ポケモンと言うのは戦闘中、もしくは日常生活の中で突然技を思いついたりするらしい。

技マシンと呼ばれる技のデータを詰め込んだものもあるらしいが、ポケモン自身が思いついたわけではないため、合う合わないがあるということ。

図鑑のはそういう説明も書いてあった。

エクレア博士には感謝しなくてはならないのかもしれない。

「チュチュ！ 『エレキネット』です！」

それを聞いたチュチュがその小さな体で走り出し、電気を纏ったネットを打ち出す。真つ直ぐ飛んで行くが速度は結構なものだ。

それを見たイリオは咄嗟に指示を出す。

「『電光石火』で避けろッ！」

「は、速いです……！ 攻撃が当たらない……！」

「リオルは身のこなしが軽い上に攻撃力もある。一筋縄ではいかないポケモン……さ……！」

それを聞いて私は凶鑑を見る。

何か、何か手立てはないかと探る。

技一覧を見てハツとし、チュチュに指示を出した。

「もう一度『エレキネット』です！ できる限り連射してください！」

それを聞いて飛び上がり、リオルに向かって『エレキネット』を撃つ。

何回も繰り返し放ち続けた。

だがしかし、リオルは『電光石火』の高速移動で避け続ける。

いとも容易く、簡単に。

「『電光石火』で突っ込んで『メタルクロー』だッ！」

それを聞いたリオルが床を蹴り、こちらに突っ込んでくる。

私はその瞬間に指示を出した。

突っ込んでくる瞬間を狙っていたからだ。

「『糸を吐く』です！」

「リオル！」

『電光石火』で突っ込んでくるリオルに対し、チュチュが『糸を吐き』出した。

それは真つ直ぐ高速で、リオルに向かって飛んで行く。

「……なんてな！ 『フェイント』だアツ！」

『電光石火』を辞めたリオルが横に飛び糸を避ける。

そして更に前へ飛んで攻撃を繰り返そうとしたその時だった。

突然、リオルの動きが止まったのだ。

まるで痺れたように膝をついた。

「……『エレキネット』、ね。ごめんなりオル」

「『電磁波』で動きを封じ、『連続斬り』で追い詰めて……ください！」

ササつと移動して、リオルにくつついたチュチュが『電磁波』を放つ。

その行動によってリオルは麻痺と呼ばれる状態異常に陥る。

この状態になると上手く動けなくなってしまうのだ。

と、図鑑の説明に書いてあった。

そこから畳み掛けるように攻撃をする。

イリオが指示を出す。がリオルは麻痺によって動けず、悔やんだ表情を見せる。

「……セナちゃん。俺の負けだ。戻ってこいリオル」

イリオがボールを前に差し出して、リオルをボールに戻す。

チュチュはまだやる気のように、ぴよんぴよん跳ねていた。

後ろではコーちゃんも嬉しそうに跳ねていた。

「あ、ありがとう、ございました！」

「いやいや。俺も楽しませてもらったよ。こいつにとつてもいい訓練になっただろうしな」

そう言いながらポケットから黒色のリングを取り出す。

イリオがつけているのと同じリングだ。

私の近くにやってきて、手渡しでそれを渡した。

私はその黒色のリングをマジマジと見つめる。

何の変哲も無いただのリングにしか見えぬ、嵌っている石もただ綺麗な石にしか見えぬ。

お守りみたいなものなのだろう。

彼もそう言っていたわけだし。

「さて！ それじゃあ二匹と一緒に並んで。写真撮るからさ！」

「と。撮るんですか？」

「記念にね」

きつとそれ以外にも目的はあるのだろう。

それについてはあまり気にしないことにして、私はチュチュを肩に、コーちゃんに側に。

カメラに向かって笑顔を見せた。

레이크と自称エリート

「これからよろしくな、ピカチュウー！」

そう言う肩に乗せたピカチュウが頷いて返事をする。

色々な苦勞の果てに、俺はついにピカチュウを捕まえていた。

自分の姿を見つみると随分とボロボロで臭い。

まあ、ピカチュウと仲良くなれたし良いでしょう。

それに珍しいポケモンをもう一匹捕まえられたのだから。

疲れたし早く森から出たいところではある。

しかしここはどこだろうか。

ピカチュウ追いかけののに必死になっていて、もはやどこかわからなくなっていた。

「どうやって帰ればいいんだ……？」

さつき捕まえたポケモンはボールの中で休まし、ヒトカゲとピカチュウを出して周囲を見渡す。

二匹も似たような感じ……ではなく。

一緒に遊んでいた。

まあ仲良くなるのはいいことだから、何も言わないことにする。

「どうしたもんかなあ……ま、歩いてれば出れるか！ ピカチュウ、ヒトカゲ。行くぞ！」

二匹は嬉しそうに鳴いて、ピカチュウは肩に、ヒトカゲは隣に並んで歩く。

道中、邪魔をしてきた虫ポケモンたちを特訓ついでに倒しながら進んで行く。

だがこの周辺の虫ポケモンは幼虫系。

つまりまだ弱いポケモンばかりだ。

「大した特訓にもならないか……そう言えばセナって勉強したのかな？」

なんとなくセナのことを思い出す。

コイキング一匹、ただそれだけで戦おうとしていた女の子のことを。

それでいてポケモンのことを何も知らない彼女のことを。

それよりも出口を探すべきだと思い周囲見渡した。

その時、見たこともない人影を見た。

もしかしたら出口を知っているかもしれない、と思い手を振りながら声をかけた。

「おーい！ その人ー！」

その人は振り返って俺を見ると、近づいてきた。

「何かしらっ？」

大体俺と同じくらいの年齢だろうか。

腰にモンスターボールをぶら下げた、赤髪の少女。

なんともつまんなそうに俺を見ている。

「あれ？ ポケモントレーナー？」

「ええ、そうよ」

「じゃあ俺と戦ってくれよ！」

どうしようもなく、戦いたいと言う思いが先に来てしまう。

道を聞いたりするよりも、相手がポケモントレーナーならば……と言う思いが。

しかし彼女はこう答える。

「嫌よ。アンタ、弱そうだし」

「……は？」

「私はエリートよ。優秀なの？ わかる？」

こいつは何を言っているんだ……と思ったが、これが自信過剰という奴なのだろう。

しかし、尚更戦いたくなってきた。

強ければ強いほど嬉しいから、強い奴と戦いたいから。

俺は戦いためにこう言った。

「ふーん……負けるのが怖いんだな？」

「……今、なんて言った？」

「負けるのが怖いんだろ？ 俺に負けるのが」

「……………いいわ。ブチのめしてあげる」

「こう言うプライドが高そうなやつほど有効な手段。

『挑発』だ。

ポケモンの技としても重宝されるものだ。

「……………よし。ピカチュウ！ 任せたぞッ！」

「行きなさい、キノココ。勝ちなさいよ」

迷った森の中で戦いが始まった。

ピカチュウVSキノココ

(うーん、キノココかあ。ピカチュウじゃまずいか……?)

キノココは草タイプ、それに対してピカチュウは電気タイプだ。

相性が悪いと言うわけではないが、草タイプに対し電気タイプの技は効きにくいのだ。

と言ってもまだそこまで技を覚えているわけでもない。

だが出来るだけで行動をさせまいと、指示を出す。

「ピカチュウ! 『電光石火』だ!」

「キノココ。向かってくるピカチュウに『体当たり』よ」

ピカチュウがカクカク曲がりながら高速移動でキノココに近づく。

それに対し、キノココはピカチュウに激突しようとした。

そこで、向こうは指示を変える。

「今よ。『やどりぎのタネ』」

ハッとして咄嗟に指示を出す。

「『影分身』だッ!」

『影分身』を出した時にはもう遅かった。

出す寸前でタネを植えられ、少しだけピカチュウの移動が遅くなる。

(やらかした……! 『痺れ粉』が来ないと油断してた……)

ピカチュウは電気タイプ。

痺れ粉のような麻痺にする技は効かないのだ。

だからこそ、油断をしていたのだ。

全力と言っておきながらこの様である。

「くっ……『高速移動』から『電光石火』! 『フエイント』で背後を取るんだ!」

「キノココ。背後を取らせないように『毒の粉』。そして『悩みの種』」

ピカチュウは『フエイント』による背後からの攻撃を仕掛けようとするが、周囲には撒かれた『毒の粉』のせいで避けざるを得ない状況になった。

そしてそこを狙われ、『悩みの種』によって特性『静電気』を『不眠』に変えられる。

これで直接攻撃からの麻痺を望めなくなってしまう。

(て言うか、自分の周囲に『毒の粉』を撒くなんて何考えてるんだ……!?)

見ればキノココは毒状態。

少し苦しそうであった。

「勝ちなさい。何としても」

「……嘘だろ？」

そこで俺は気づく。

奴がどんなことしても勝つ、非情な人間であることが。

ポケモンが苦しんでいる姿を見ても何も思わない。

ただ勝利を求めるタイプだと言うことが。

それに気づくと同時に、俺は決めた。

「……ピカチュウ。俺はお前に賭けてみてもいいか？」

今さっきの話だが、ピカチュウに俺の憧れを話した。

レッドと言うとポケモントレーナーについて。

他の二匹も嬉しそうに聞いてくれていた。

(ピカチュウは俺の話を理解してくれているだろうけど……問題は、再現ができるかどうかだ)

うかだ)

ピカチュウに目線を送ると、小さく頷く。

俺は今からある技を試そうとしていた。

「なあ、知ってるか？」

「……何を？ 時間稼ぎなら……」

「こつちだつて時間稼ぎなんてしてられねえよ……俺が言いたいの、カントー地方の

伝説のトレーナー、そのピカチュウが放ったある技を」

本来は何度も練習を重ねて挑む技。

だがもしも、さっきの出会いが嘘じゃないんだとすれば。

きつと、きつと行けるはずだ。

「……ピカチュウ、『電光石火』ツ!!」

「キノココ。『メガドレイン』で攻撃よ」

わかってる。

俺は矛盾していることに。

自分が今、一番非情だと言うことに。

ピカチュウを無茶させていると。

(成功しなくてもいい。この技は一か八かだから)

「ピカチュウ! 『スパーク』を……中断ッ! そのまま突っ込めツ!!」

「なっ……!?! キノココ! 避けなさいッ!」

キノココは速いわけではない。

明らかにピカチュウの方が速い。

だから避けることはできなかった。

ピカチュウは小さい電気をばちばち出しながら『電光石火』を繰り返す。

繰り出したのだ、一瞬、当たる瞬間大きな電気を出して。

「……不完全、だけど。成功したのか……?」

キノココを遠くに吹っ飛んで戦闘不能になっていた。

一方ピカチュウはピンピンしていた。

(強い……いや、それだけじゃないのか? 俺を、信頼して、くれてるのか……?)

疑問は尽きない。

失敗するだろうと思っていた。

だからこそその矛盾だったのだが……不完全ながらも、成功していた。

ただそれは……。

「『ボルテッカー』……? 何なのよ……成り立てのトレーナーがッ!」

怒りを露わにして、次のポケモンを出す。

(本当にあれば、『ボルテッカー』なのか……?)

ただ一つの疑問を残して、俺は疲れたピカチュウを戻して次のポケモンを用意する。

向こうが出てきたのはズバット。

対して俺が出したのは……。

「……よし、任せたぞ!」

俺が出したのはドラメシヤと言う、少し陰鬱そうなポケモンだった。